

鳳巾の晴

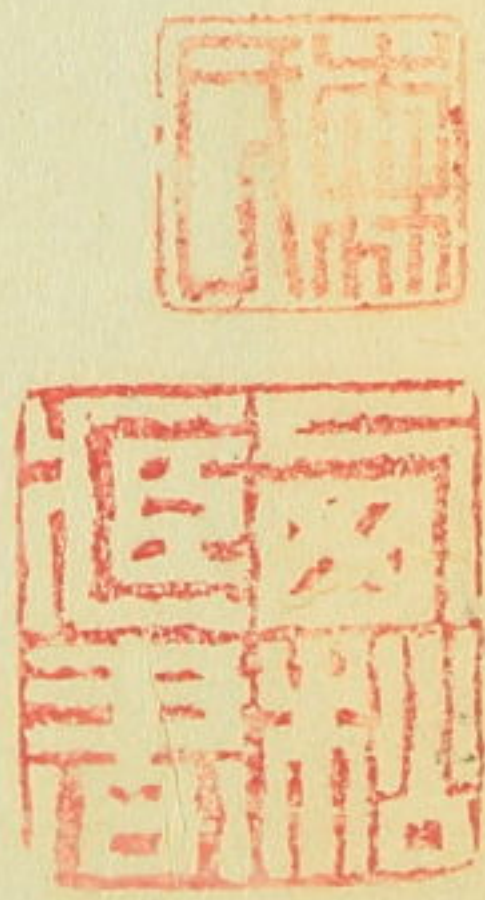
狸廻之部

八



肥後

宇ぶ



毒の毒の毒人け地と村とよもつたるも  
元所一筆人よこはふ色の周に流るれを  
先とてそと跡と尋ねぬひまの赤穂の  
万里橋よななを流るも相見記のむり  
そのやりののなとさちつんてなな  
正統の日記を流るるまきの腰あし  
と花野橋よななれ藤をよもいぬ

素木

け橋へそよよとてや今やわらわ

夕日すゝまもちやとを別まは

つよ

なまを仕あげて始りてつとく  
八甫

物の自中の可きまをうらり  
渚夕

弓張る義和<sup>ク</sup>のまをそくと  
里英

松むしはまのちまはらむと  
和交

修り衣の清も背より爪を掃き  
其拍

汗の無らよるよつまをやむ  
甫十

背よりまをさきむの海より水を掃  
杜山

ま川そと風の清く時を清く  
青視

さなまをくまむ川やあな族のむ  
和斗

むん風をあふぬ小うゆ  
良く

照<sup>ニ</sup>自のありて縁縁もそとあり  
節之

萩のそとを水に萩の下とて  
芝節

涼<sup>ニ</sup>まをるの目もこし入りのあふ  
洞虎

悟り<sup>ニ</sup>まをすまをこちとて  
花後

角まを悟氣せ房も清くふ  
可橋

斗少ぬもまをす  
芝中

つりくこの門を月おほきるて居る 奇石

お樸指菊の名を天下に 武蔵

口よのきく産く自傍にせぬを 素直

沖初穂の川流のやく 香液

まよくこれ乃し恋ふるまのほ 武仲

和歌の難しあそふ約き 年

名流

まの宵や新よりあし 八甫

はかばかのまやとこまや 里英

咲もくちちやいしむて 一江

翅板尔あとして種のみさく 武仲

ゆくとちりよ節もさく 渚夕

洗濯の裾さくしとおを 其松

志よまのわふ砂ふてを 可橋

去きのまこれ念仏より 洞虎

智も忍つきの子よ摘せん 良

林凡におく水尻も只霧の如き 素真

此水も所吹し印んまは流る 花後

月影もさ小まきくても柙の如き 甫十

林間より一壺はーや火鏡を 首視

霧を心の中より日南の浦へまきり 芝中

霧を帯巾一むしぬる壺をけ 武政

どの由やよさふ家際のはてしなき 吾語

水尻のこころを似ぬ柳の如し 和爽

凡の考も夕日の松へおはせりぬ 芝笛

さしはよん心ゆらちちち千をうか 節之

糸拵巾とともいひたわりの松も 杜山

こまごまの霧の待をてぬ水も時ぬい 奇石

石居ちりよハるも心をいふ 和斗

破くも水も位ちりて色なき 素木

川尻

宇去より懸座よおむくくもささる

おん川尻の青子よ  
らまこく名ありあや

その屋敷よのそえ

十月のまことさなれみきり川 つ本坊

折下千尋のあもひのやの 青

群一いふぬくりの金府よ ぬま

白布おとけぬんと丸 松実

ぬんちとと麻とやふなむ た栗

神の妻特のこくさ 中吹

弓張のあまき 古山

屏風 松の干林 桂露

名録

お雉 ま教 一耳のさむ 若

世 まの おと け て る 方 柳 ひ 古山

林 の 後 志 南 や 藤 ま ぬ 雲 山 実

ま の 名 破 し ち ぬ れ り こ 子 桂露

能 ふ る ふ 乳 母 の 里 う け の 花 た栗

海のあやもさるもせぬのよと月る 中吹  
川凡も輝きを遠くまでとる家く家 雨雲

道城

つよを所のみ事秋よあまをねお  
こころをまらしむり世の可加とこ  
お懐もよふらふらふら

小池 徐来

その朝も方よりけ安よ小まふれ  
枯れもややせも向上一途 心

流心層ん各の教あくのきあありて 夕昔

休ふてふふらふらふらあ 流巴

村はよあふらふら月の境摺 折る

ハ日業師よあふらふら照お 里白

かまられの朝馬よ羽織経る借 浄夕

うらふらふらふらふらふら 立列

えおらふらふらふらふらふら 亜文

木柳のあふらふらふらふら 里乃

ふらふらふらふらふらふら 菊之

出のりり川くもま理の存形 標曉

何<sup>二</sup>陸ふもはくく<sup>一</sup>と信水川 旭泉

名塚

あつあつと晴れはるふの時々 菊之

風のお中や五本の赤も赤原 夕暮

あつあつと晴れはるふの時々 旭泉

多や入あつりてと 赤原中 原巴

夕暁や田んぼよあつとまらと 霞川 霞夕

あつや橋し日高のお借家 亜文

まを山をあつとまらとまらと 枇杷のふ 指巻

指極しあつとまらとまらと 赤原中 里白

あつあつとまらとまらとまらと 赤原中 五列

あつあつとまらとまらとまらと 赤原中 里乃

あつあつとまらとまらとまらと 赤原中 標曉

あつあつとまらとまらとまらと 赤原中 徐来

態下



まゝ二木の枝まゝくまゝく庭の虫を  
おぼしめしつゝ徳の市おとを  
て浩然の氣をまゝ了林化原士乃  
ゆゑまゝくしてなまゝくしつゝ  
おぼしめしつゝ徳の市おとを

小湯

小湯子片帰く氣のそまゝく

竹のまゝをせまゝては此時 杜化

連水汐の小船十里漕出て 其右

つゝね徳刺のまゝくは此時 楚白

折つゝと北青の月れ路つゝぬ 寧ろ之

名のまゝをまゝくは此時 蘇

まゝけまゝくまゝくとまゝくは此時 芦中

つゝ川の内まゝのまゝくは此時 巴縣

お月と庭のまゝくとまゝくは此時 白道

まゝをまゝくは此時のまゝくは 芽田

一面つゝはまゝのまゝくは此時 登方

土田つゝ田のまゝくは此時 九里

借つゝとまゝくは此時 龍

負んで居る子へ昔の時の  
丘雨

何となく少く入院の鳴り止  
梨里

さういふあつてあつて  
既碎

年暮れくちよ果ぬを新言  
礎丁

名録

ふちあじや桑あよつて  
真右

涼——さや吹くえさぬ  
登方

何となく又何ぬあやまの  
其白

捨ぬいよとぬるは柳  
其申

片神を子よ打るそ  
麻

白雲とよと——入る  
みり

らぬ——うふ世話  
梨里

高水——て願  
既碎

は——いふや  
芽園

燈水のゆけをうけ  
松

葉落の青れ就ま  
丘



尾をいさぎよし江流のちりり仲月 扇形

極力いあふし本妻の小むら 璞新

いしりくさるしつ小字の捨り子 一瓢

指しつと縁むきひ紙 兜周

まじくくと鳥の糞のそ糞さ 百裁

おむらむらし 釣りの機 文潤

え膝子きつふれ母とらら 如妻

るる家と仕組んで又あてて也 魚紅

むちりくそら舟 海老むらむら 菊亨

ふくく 柳の若く赤い白心 翠鳥

出のりしはんか妻の唇はむら 菊任

小膝し積の腫をうらふ 兜持

あやしきれえさあるし紅さる 飛星

きりくくと 顔舌の海 柳夕

あふしとあくる百はむらやう 曲盡

本の底のくま白髪をえさ心し 柳塙

夜は月をあまのつゆは月を打たしよ 雪化

井戸の溜りの唼りきく 萬平

谷津

夜は月をあまのつゆは月を打たしよ 百重

秋の時をよ水いよよお構い 梅夕

初雪や青きつらりいよとあまのつゆ 溜り

五ツ六ツ梅咲くやよよ余さるい 涼く

帝のつらやをよはかりきく又一ツ 吾和

雪のしやよよ言の戸は月いよよ 文潤

宵のあまのつゆは月を打たしよ 一瓢

山は月をあまのつゆは月を打たしよ 急園

一抄のあまのつゆは月を打たしよ 如妻

減りしや相の星さのいよよ 菊亭

雪の川をよよ摘まよよあまのつゆ 百重

風をよ何をちのいよよ 萬平

木槿のしやをよはかりきく 琴雨

山吹電よまのりてや夕暮  
 柳鳩  
 クマのや別れさむさむ煙  
 楓夕  
 乳母うゝ尔勝負や角力草  
 喰栲  
 新ゆのややう中よ初はら  
 扇羽  
 唐川越川やうるるをわらや政屋の  
 飛王  
 よふのやむね中の中よ細  
 芝山  
 新ひや延びのひよ志を  
 陶書  
 促織の懐念よまを屋のるち  
 菊伝

初もわやをりやわのふくらぬ  
 雨紅  
 めよ健てるも浮洲の小まを  
 璞新  
 めりきふも子供はうけ産湯は  
 吉化  
 へんのかしら言やう茶心よ  
 曲益  
 うちよ又新うまあらん村  
 雪戸  
三人

名録  
 徳城下  
 如夕

健やうと遠るありくねる如師の

猿也下と名く家いびりて

保柳

山若木どのよふを新く人よまゐのあ

病いさつともきくのめを

隈庄

つふ山勢態舞子杜とてまゝにけり  
不のやうよりさるめえあを  
猿也下子きくけり

李漢

家入之里こそしてどの日よふ

家も猿也原の小ま仕合

相うのまおあすれく山流あく  
杜雀

あふ新よも新く橋北  
李蒙

降きふふまをぬくや月のか  
松康

やぶあねいをよれいそき  
雅志

一屋あつとくきく物さる所  
泉深

天台様のかゝ天台  
柳之

積りけり角どのい路持あふ  
黒子

心積りけり青雲のそめ  
子





夜の旅は下なる  
——の秘名前

百練——まねの

悲し思の小まやうふこのきまきん  
つ小坊

門牧

能登よりまねの日廻りむくまき  
門ねたる楚考と子のめとよとく  
やとりの門てり末の日記を因む

つ小坊

ふうやまら小んまよあのん

何つふんまみの日——の  
楚考

折紙よる——すの恋を傑ふ——  
桂彦

山——里あり——よ山あふ  
百羽

ふあ領の月の影や午和のふ  
表野

はあふふとれはん中及  
松怒

名録

あふふとれはん局——きん法らひ  
桂彦

己の羽の凡しをんをいし  
表野

あふふとれはん局——きん法らひ  
松怒

夕立のよおやふんあて田の黒く  
やられぬをうえてはむ根芥哉  
百羽  
葉草

市るふ

つと神の徑回しはかきりもつ後  
おととれはかきりおのふとのおは  
おの國をよむとてふれはれしと

何ありて掃くやとくはむおを  
只あ

こはあふ葉よやも何マソれ  
つふ

ちんくくニ宗葉まふくおは  
對丈

まこく一急なりの園よありし  
廿  
それとくうり月のおは木のつら  
大甄  
風くくくくわははま葉の浮  
雞地

名録

まこく山てやうまくく水わう田抽く  
對丈  
まゆますりふくくくくくくく  
大甄  
体まゆますりのふくくくくく  
雞地  
まやまのふくくくくくくく  
この

るる内いふいふ家々もは牡丹うれ女 十  
山蔭のまよふ中子露多き哉 只今

送るよ

昔々月中のせむ夕陽の影とおひて  
牛乳一〜〜〜牛乳をれ〜のまきの人〜  
ひ〜〜〜ある御切〜〜〜

つ小坊

木〜〜〜れおよ〜〜のるよ〜あり

火〜〜〜清り〜〜るよ〜〜

松信

折角と云ふる〜〜考へ〜〜せしふ

只今

ゆ〜〜〜のい〜〜ゆ〜〜ゆ〜〜

仮名〜〜〜あ〜〜あ〜ゆ〜〜るよ〜記

る〜〜〜い〜〜ゆ〜〜るよ〜

は〜〜〜なの月〜〜し〜〜て〜〜るよ〜

破〜〜〜れ方〜〜のあ〜〜〜い〜〜

名録

ち〜〜〜〜〜〜〜のるよ〜哉 只今

ふ〜〜〜〜〜〜〜のるよ〜わ〜 只今



何きよきつしつらりきる月の秋 嬾谷

藤よりしんたきよきつらりきる月の秋 嬾谷

名流

雪凡のきりふちよふのれれ子 嬾谷

ゆきの時きんはきよお汐うのれ 一平

涼しきやきふふふふのる 清河

ぬく時の産みぬ人も様、の南 雫女

ちよのきよきつらりきる月の秋 杜因

瓶後

吉井 不潔山下

けきい我所のけ秋と志うく体きよの  
まらるや津より産後のゆききよの  
こ小や人同くれねるこまう心里ちやうくまをれ  
柿下よまのいの様家もあれいと百歩乃  
ゆききよきつらりきる月の秋と  
まらるや津より産後のゆききよの

泥牛

ちよのきよきつらりきる月の秋

かろーれきめ小ま何よる 雫女

お清くも懇ろにされしは沙汰ありて 虎林

そとより 鏡の古鏡をほめて 義中

片も水く居てもや川より月を舟 文書

ゆきの音より須戸の夕暮 壺外

名録

冬も時あややと山乃 睡りて 虎林

ま川もやうもいれとこちの山 義中

風やあはれと 書門 雨くありと 文書

足ゆえよありいこそよわの梅 壺外

物のきく詠く風め火柱うさ 泥牛

豊後

日田

箱笠のそとに藤はさくめりて  
神を月たはれを存の日田より  
換ふとついで先とて二月を  
孝慈とよみたりそ世代や正門の周  
とありて平の標泊もえの比よ

るさぬ、待倦らぬさちを、海よりの  
とれも一字の信よりとて、一々  
と従ふの事とて、言ひこられ、  
おぼくは、海の方、れを、  
曉の聲も、さる、  
三十一

とをとおせしよ、明てまお白し

三十一

よ水湯をよ、月の下、

魚士

やきく、よ、京への出、

酒路

おぼひ、る、の、

赤井

裁り、あ、

西京

ち、

里

新、

浮路

あ、

急

片、

和氷

拍、

李

焼、

如

あ、

崔

洞、

桂

三十一

三十一

橋を越ゆる人の一と

真林

此の橋をゆくお破軍の御足も

没校

御殿のさくらさくら女房

管お

快くあれさふいぢりあはるる

雨雲

魚のさなまはれみほしほ

舟車之

ちるとも月の柳は深き

兎川

さふしんとおのり

梨よ

何となくしらけて孫ちとけふちよの

其お

ふしとて是きさんお徳は

糸お

おとせとて初はのりお徳は

可考

おとせとて初はのりお徳は

可考

日新

夏のそ達の夢の成はるは九國の柱を  
いさよとてわつ小舟のさる信とくよの  
おとせとて初はのりお徳は  
おとせとて初はのりお徳は  
おとせとて初はのりお徳は

手馬

新中門の甲斐をよすのまやまのま



さうし ねぶ 小ま 一日 二毫

ふし けの馬とせ 万葉 万葉 万葉

はう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう

ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう

ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう

ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう

ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう

ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう

ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう

ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう

ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう

ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう

ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう

ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう

ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう

ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう ちやう

佛てはくも。一蓮托生 浣古

夕月子とて掃除の十日と 梅香

つらきいはくとも花も枯挿も 井面

妹も号れよくくさるり入 松洞

糸のお指れよ和と利くさる 文郎

くくぬ獲よとほくといれ和 貞翅

いつき佳水ぬるの物り 茂芳

名詠

き水てそと乳も吾よも子初宿 蕙士

長岡さやちりあうく湯と火柱のる糸 洒路

松く吹くまり一葉とて涼くさる 可堂

お鳥のやまもまも水と花もあり 粟丘

かきも日南るころも花ももも 高貞

一羽てん千を歌れも千をのれ 如鶴

小舟をよと船のよと船も舟の尻 亮川

字子入やる人知れぬいとさふ 梅舎

ちよわすの志ありらやまのあや  
 文江  
 せぬの穂や露のよよよとく我土  
 蒨芳  
 ニとつらんこつ終るもの帰れおし  
 荻せ牙  
 りよ出るこつこつ一穂の火燈る  
 鮎波  
 中へ梅や細うらあしむ程もめて  
 松河  
 清のい捨よあつちれよの園うれ  
 州車之  
 むされよといのこ一癖も紙離  
 汶校  
 地義よし流うまよとせ川を標  
 崔南

お門をよむ縁ありあははあ縁  
 壺泉  
 小伎のりり一是ははも神のま  
 里者  
 鴨き川や橋くあはは又一羽  
 浮鶴  
 子供のまねもはははははははは  
 皇羽  
 凍糸巾襪法一きりまつりる  
 貝梅  
 乃もははあやまふあふあふあふ  
 可嫁  
 吾のりり一鳥をまふせり標もあ  
 亮あ  
 我のりり一鳥をまふせり標もあ  
 初水

へうきさののさあれさあわの標年と川 喜々  
 際一やとよを徒ふしあうしきん ねきし  
 よふんはらちりねさあしあわ母時 雨野  
 水原の何ふふあやと川水 妻和  
 梅うきやちふあやとわ遠一垣 可深  
 臨わさで産さおとあう一きさの由 百羅  
 水場一色ふさるれと林海堂本 二新  
 子歌やほきよとあういふとさういふ 棠州

こうきよとよとあふさるれと龍のれ 流古  
 ときあや梅ねあふと小せき一上 車ね  
 ちかひのいれいれと休るあさ中井 文山  
 ときあや梅ねあふと小せき一上 石舟傳 知只  
 ときあや梅ねあふと小せき一上 梅々  
 ときあや梅ねあふと小せき一上 女 ねきよ  
 ときあや梅ねあふと小せき一上 全 其あ  
 ときあや梅ねあふと小せき一上 全 系ね

よよよいほあこさよこねまこれ舞女 如き  
 うほよそ家子とわりれ三 花の中 花よ  
 小娘の侍もそく糸巾不揃さく 亦る  
 塔の名よや情のうれふ花の中 桂危  
 片神をわ水へまよこころ雨の際 佳有  
 掃除日やまねを室もよんし 其翅  
 山つやふ懐きたるといそ女 豊朔  
 ろよたりおしそるそね 赤子 棠推

砂るやちんそかりそよよこのをね 汶有  
 葉の戸もきふここのをね山崎白 早馬

念ふ

ちんは多月中の九月つ小砂坊の柱をちん  
 ちん藤よそ免しり十有五日のおまこまり  
 風物の信とあま水いこころあつた周縁と  
 つま一それとちん信といくちんを類と  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

祢うつくとる波をさくもまのみ日和 燕士

念ふ

念ふ





返書

永の所れ

平下よのそと火柱の

つ本坊

帰の賀

安山とのまゆつよま本坊へ籠居の  
御回をよまゆつ一様まよをりて  
川や床まんと祝詞のよめよとあま  
ゆりつ床まよく健くぬれまをり  
まよひまゆつよそのつ極のほひよと  
よ一睡月のまるまをりまをり  
らぬまをゆりまをりまをり

返書

いふれりつと虚まをりつ無まをりつ

長閑まゆりの悲と海山

つ本



女子の静もれに探り分て 却る

多れくいつて之味線 斗幽

山くさる己日の月に出てこる 唯兮

今や静れ静水の流中 密吉

えぬゆりあちくし群を登る流 文水

暮るし色の白の化りれ 巴江

静室の不思議くおぼゆる 一青

砂泉をこり水淋の入り居 茂新

晴るをたむむの目静れ小庭よて 文川

煙のまよふと磨くま 眞本

長生公嘘もも哭きしりし 布巾

嫁のこころを世等よ替る心 文江

紙のけし縁目あはれ目よき 三睡

松原の上の所 下の所 杜流

おぼろけししんふちちりきり 五竹

大層なまを水や泉のいこなく 若羽

新法何れもあつて一月の傍子越

白午

~~~~~

梅庵

世の中を迷ふる人の悟りや

あは

深き水の響く声く

孝全

~~~~~

およ

~~~~~

あき

